1 1
学図
小国419

文部省検定済教科書
財団法人 教育図書研究会編修

教育部
資料室

四年生の
国語
下

小KC
G16

学校図書株式会社発行

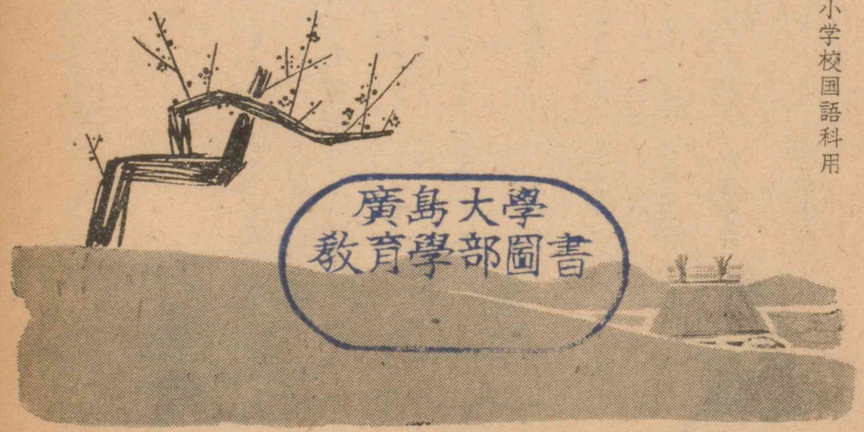
60329
教科書文庫
6
810.
34-1950
01304
49745

寄贈
教科書文庫
6
810
34-1950
0130449745

四年生の国語 下

昭和二十五年　月　日文部省検定済小学校国語科用

広島大学図書
0130449745



廣島大學
教育學部圖書

学校図書株式会社

中央図書館

広島大学図書
0130449745

もくろく

一　子供しばい……五

(一)「もず」——みのる君の作った童話……六

(二)しばいとすじ……十二

(三)しばいの場面……十五

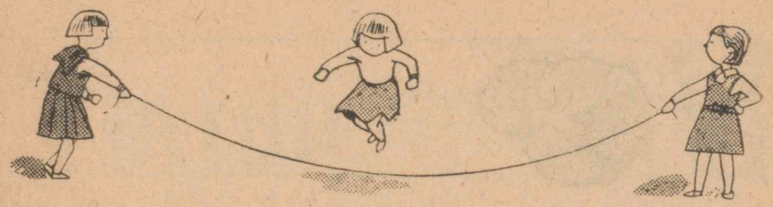
(四)「もず」のしばい……二十一

一の場面……二十二

二の場面……三十

三の場面……三十六

二　よい話し方よい聞き方……四十一



(一)人の話をよく聞きましょう……四十二

アラビヤン・ナイトから……四十二

だいこんとダイヤモンド……四十七

よい聞き方……五十三

(二)正しいことばを使いましょう

——つばめの通訳——……五十五

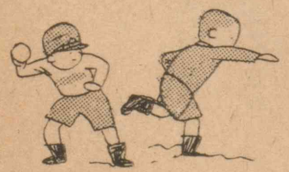
三　花を愛する心……六十三

(一)野ぎく……六十四

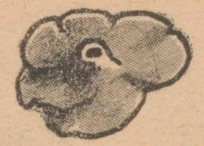
(二)私たちと花……七十一

(三)二月の花——よびかけと詩……七十六

うめ開く……七十六



うめ……八十四
つばき……八十六
ことばの表……八十九
漢字の表……九十二



子供しばい

この課には、みのる君の作った童話を、クラスの人が共同で、子供しばいに仕上げていったことが書いてあります。ひとりひとりが、めいめいにちがった作文を書くこともけっこうですが、このクラスのように、一つの問題を、みんなが考えあって、新しいものに作りあげていくことも、たいせつなよい勉強ですね。みなさんのクラスでも、もうたびたび子供しばいをしたことがあるでしょう。また、いろいろしばいのすじがきを作ったことのある人もあるでしょう。しばいのすじがきを作るには、このクラスの人がしたように、童話や物語をもとにして作る場合もあり、また、作文を書くように、いきなり作ることもありますが、初めのうちは、このクラスの人のしたようなじゅんじょで作ることがやさしくて、おもしろくできます。上巻にでているリレー式童話などはいい材料になりそうですね。自分たちの作ったすじがきで、自分たちでくふうして、しばいをすることができたら、どんなに楽しいことでしょう。この課はそんな勉強をしたい人に、とてもいい参考になると思います。

（一）「もず」

——みのる君の作った童話——

村の近くの雑木林に、一わのもずが住んでいました。

くぬぎやくりをはじめ、たいていの木は、北風に葉をもぎとられて、冬空にかれたえだをふるわせていました。

林の南側は、なだらかにかたむいて、そこにはおきわすれられたように、一本のつばきがしげっていました。緑の葉の間からは、まるで冬を知らないような、あざやかな赤い花がさいていました。

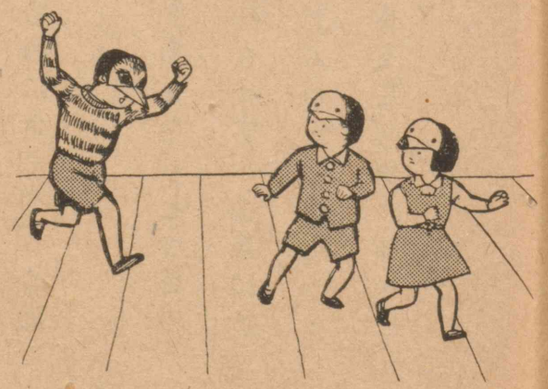
森や林の小鳥たちは、このつばきがすきで、いつも楽しい遊び場所にしていましたが、もずが来てからというものは、一わもよりつ

かなくなりました。もずのとがったかぎのようなくちばしや、光った目がこわかったからです。

時々、もずがいることを知らないで、遊びに来る小鳥がありました。それを見つけると、もずは、自分の家をうばわれでもしたように、かんかんにおこって小鳥を追い出しました。

もずは、夜が明けると、きまってこの林でいちばんせの高いくぬぎのえだに止まって、するどい声で鳴きました。

くぬぎのえだからは、近くの村が一目に見えました。森のずっと向こうに、雪をかぶって続いている高い山も見わたせました。もずは、そこから四方を見るたびに、自分ほど幸福な者はないと思うの



でした。「この林も、全部自分のものだし、どこへ行っても食べ物にはこまらないし、何といっても強い者が勝ちさ」――こう信じきっていたのです。

ある日、この力じまんのもずは、自分の力をためしてみようと思いました。そこで、お気に入りのつばきの花をむねにさして、くぬぎのえだから飛び立ちました。

山をいくつかこしました。谷をいくつかわたりました。七つ目の山で、強そうな山鳥にあいました。もずはおそれもせず、山鳥に近づいて行きました。

「きみは、この山に住んでいるのかい。」と聞きました。

山鳥は、だまっていました。

「ふん、きみが住むにはもったいないね。」と言って、もずはあたりのけしきを見ました。山鳥がおこったら戦ってみようと思ったのです。人のいい山鳥は、もずの相手にならず、しげみの中にすがたをかくしてしまいました。

九つ目の谷をわたった所で、一ぴきの白うさぎにあいました。もずは、山鳥の時と同じような口のきき方をしました。こんどは、けだものと戦ってみようと思ったのです。

うさぎは気にもしないでわらっていました。そればかりではなく、雪になるらしいから早く山を下った方がいいと勧めました。

もずは、うさぎに礼も言わないで飛び立ちました。ところが、十三番目の谷をわたって、けわしい山にかかった時、晴れていた空が

だんだんくもって、とうとうはげしいふぶきになりました。
もずは飛ぶこともできず、木のかげにかくれていましたが、ふぶきはやみそうにありません。そのころになって、ふもとの林を飛び出して来たことをこうかいし始めました。
そのうちに、もずの足やはねが、つめたくなってきました。もう目をあける元気もなく、雪の中にじっとうずもれていました。もし、このままだったら、もずはこごえてしまったにちがいありません。
さいわいなことに、九つ目の山であった白うさぎがふぶきの中を走って来ました。もずのことを心配してさがしていたのです。
「さあ、ぼくのうちに行こう」。
うさぎは、ぐったりしたもずをだくようにして連れて行きました。

その夜、もずはうさぎの毛がわにあたためられて命拾いをしました。
よく朝は、美しく晴れていました。
もずは、心からうさぎに礼を言って、ふもとの林に帰りました。
それからというものは、もずの気持がすっかり変わりました。つばきの木には、小鳥たちが毎日遊びに来るようになって、林の中は、小鳥の声でにぎやかになりました。いままで、小鳥たちにいやがられていたもずに、たくさん友だちができました。
もずは、いつものように、朝になると、くぬぎの高い林から四方を見わたしました。そして、これまでとはちがった気持で、自分は幸福だと思うようになりました。

（二）　しばいとすじ

みのる君の作った童話が、新しい文集にのりました。さしえのもずは、子供が、ひし形の目と、かぎのように曲がったくちばしを、ぼうしにつけていました。先生が書いてくださったのです。

文集を読み合ったあとで、とし子さんが言いました。

「みのるさんの『もず』は、しばいにしたらいいと思います」。

「ぼくもそう思いました。先生のさしえを見て気がついていたのです」。

先生はにこにこして、おっしゃいました。

「さしえはどんなにでもかける。わたしは、もずをそのままかくより、

この絵のように、もずになった子供の絵にした方がおもしろいと思ったのです。絵にはかけても、何でもしばいになるとはきまっていません。もし『もず』がしばいになるとしたらなぜでしょう」。

みんなで考えました。しばいにしたらいいと言ったとし子さんも、はっきりした答がみつからずにだまっていました。

「では、さっき読んだまさお君の作文と比べてみましょう」。

みんなは文集をめくって、まさお君の作文の所をあけました。

まさお君は、正月に初めて行ったおじさんの村のことを書いていました。変わったおぞうにの作り方や、正月をむかえる村の人のめずらしいくらし方が、くわしく書いてありました。

「まさお君の作文は、しばいになりますか」。

と先生がお聞きになりました。

「なりません。」

作者のまさお君がまっ先に言ったので、みんなわらいました。

「なぜならないのでしょう。」

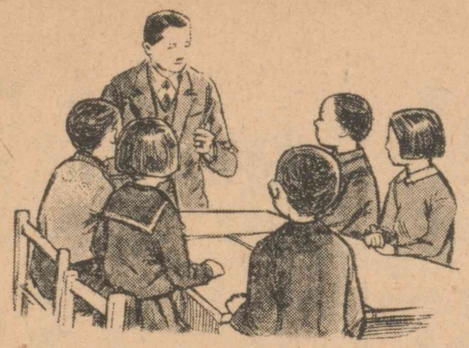
「ぼくの作文は、見たり聞いたり、その時思ったことをそのまま書いただけです。みのる君の話のように、すじがないからです。」

先生は、黒板に、「すじ」と、大きくお書きになりました。

「いいことばに気がつきました。この話を読んだ人は、初めから終りまでを短くまとめて話すことができるでしょう。それがすじです。『もず』には、まとまった話のすじがあります。しばいをするには、このすじがたいせつです。とし子さんが、初めに、しばい

にしたらいいと気がついたのは、そのすじをみつけたからです。

さあ、すじがわかったなら、それをどんなにしてしばいにするか、みなさんに考えてきてもらうことにしましょう。」



(三) しばいの場面

みのる君は、自分の作った話がしばいになるというので、うれしくてたまりませんでした。けれども、しばいを作ったことがないので、どこから、どんなにして始めればよいか、見当がつきません。

学校でしたしばいのことを思い出したり、二年や三年の時、ならった、国語の本を出してみたりして

調べました。そうして気がついたことは、しばいにするには、まず、「だれが」「いつ」「どこで」するのか、それを決めなければならない ということです。

「だれが」というのは、「出る人」のことですから、「もず」「小鳥」「山鳥」「うさぎ」と書きぬいてみました。

そのつぎは、いつあったことか、「時」を決めるのですが、これは雪がふっているところなので、「一月ごろ」としました。

こんどは、その場所です。初めに、「林の中」としましたが、それだけでは、このすじがうまく表わせないのでこまってしまいました。いくつも場所を書いていると、たくさんな数になって、紙しばいにでもしなければできないようになってしまいました。

学校に行って、そのことを話すと、みんなもこまったらしく、考えた場所も、それぞれちがっていました。

先生にお聞きすると、

「すじを、そのまましばいにすることはむずかしい。いちばんだいじなことは、『もず』の作者が、何を書こうとしたか——それを考えることです。それを、いまから作るしばいの土台石にするのです。それが決まると、『だれが』『だれと』『いつ』『どこで』『何をする』ということがよくわかってくる。作者が書こうとしたことは、もずをどんな場面に出せばいちばんはっきりするか、さあ、みんながきめた場所のうち、ぜひ必要な所を言ってごらん」

「林です」と、みんなはほとんどいっしょにさけびました。

「林」という字が黒板に書かれました。
「『林』といっても広いね。林のどこがいいだろう」。
「つばきの木のそばです。そして、ここは、もずが行く前と、帰ってからと、二度に使います」。と、とし子さんが答えました。
「さんせい」と、だれかが言いました。
「それでいいでしょう。では、そのつぎにぜひ欲しい所」。
「山鳥とあった所」「うさぎとあった所」「ふぶきにあう所」「うさぎのうち」――いろいろな声が、教室の中にひびきました。
「どこに決めてもいいでしょう。ところが、しばいはえい画とちがって、ちょっとしたことのために、いちいち場所を変えるわけにはいかないのです。おかしくなければ、二つの話を一つの所であ

ったことにしてもいいのです」。
「では」と、みのる君が勢いよく立ち上がりました。「山鳥とうさぎの所を一つにまとめ、ふぶきの所を別にしたらよいと思います」。
「それでもいいね。そうすると、全部で四つの場面になります。三つくらいにちぢめて、このすじを生かすくふうはありませんか」。
「もずの住んでいる林と、ほかの十三番目の山だけにすればいいと思います。その山で、山鳥にもうさぎにもあって、ふぶきになったことにすれば三つで済みます」。と、ゆり子さんが答えました。
「それもいいでしょう。でも、一つの所に、何もかも出そうとするとむずかしいよ」。
「先生、ふぶきなんか、しばいではできないと思います」。と、だれ

かが言いました。
「できます」。文子さんがすぐ立ち上がりました。
「私は雪の精を出して、紙の雪をふらせるつもりです。音楽やおどりを、そこに入れます」。
「ほう、おもしろい思いつきです。それは先生も気がつかなかった。そのほかにも、みのる君の話には出てこないけれど、しばいには出したいという動物はありませんか」。
そこまでは考えていなかったらしく、だれも答えませんでした。
「それでは、これから『もず』のしばいを作ってみましょう。ひとりで作っても、みんなでいっしょに書いてもかまいません。それができたら、けいこをして発表することにしましょう」。

(四)「もず」のしばい

みのる君たちは、八人で作ることにしました。初めの、「林の中」の場面では、おく山から来た小鳥を出すことにしました。もずには、みのる君とひさし君がなりました。だいたいの話を決めて、その場で思いついたことばをひとりひとり言うことにしました。
いちばんこまったのは、ふつう作文に書くようなことばが出て来て、しばいにする話のことばがうまく出ないということでした。そんな時には、何べんも言ってみて、話らしいことばに改めることにしました。それでも変なことばが出たり、すじからはずれそうになったりするので、みんなで注意しました。

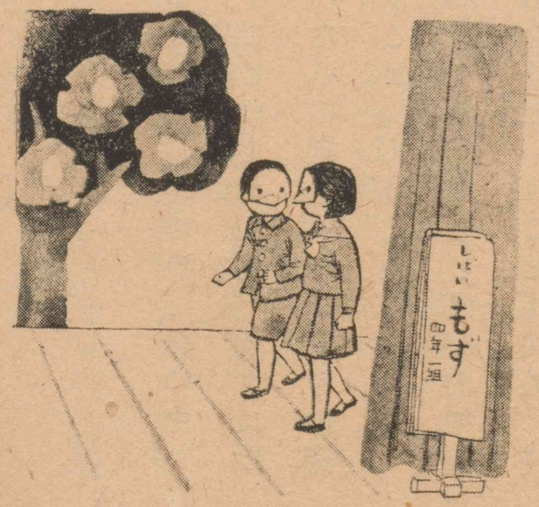
こうしてできたしばいをノートに書きつけ、最後の話し合いで決まったのが、このしばいです。

一の場面

出る人――小鳥一、二
　　山から来た小鳥の姉と弟
　　もず

時　――一月のある日の昼ごろ

所　――林の中、つばきの木のそば



――まくがあきます。一と二の小鳥が走ってきます。

一の小鳥　「もっとゆっくり行こうよ。」

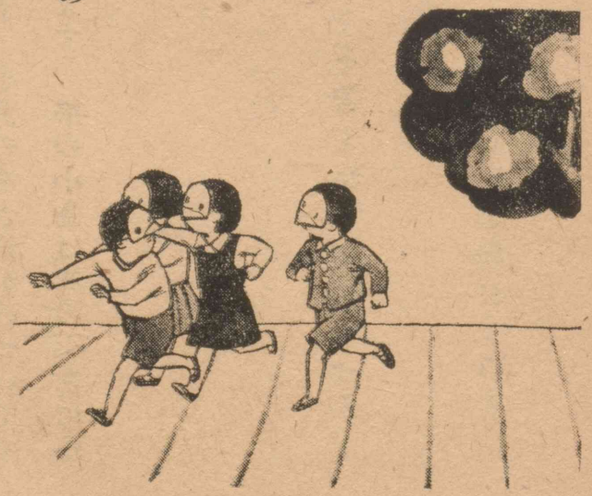
二の小鳥　「だめよ、もずにみつかったらどうするの。」

一の小鳥　「いないよ、今。」

二の小鳥　「いなくてもすぐ帰ってくるわ。」

一の小鳥　「遊びたいな、ここで。ごらん、あんなにつばきがさいているよ。」

二の小鳥　「まあ、きれいだこと。あのもずさえ来なかったら、ほんとに、わたしたちのいい遊び場所なのに。」



一の小鳥　「あ、だれか来たよ」。

二の小鳥　「もずだわ、もずが帰って来たのだわ、走りましょう」。

――一と二の小鳥、走って行ってしまいます。小鳥の鳴き声が近づいて来て、おく山から来た小鳥の姉と弟が出て来ます。弟の小鳥は姉の小鳥にかたをかしています。

弟の小鳥　「ねえさん、ここでひと休みしよう」。

姉の小鳥　「ええ、つかれたでしょう」。

弟の小鳥　（首をふって）「それより、ねえさんこそ苦しかったでしょう。まだ、おなかがいたむの」。

姉の小鳥　「だいぶよくなったわ。さっきなんかからだを動かすのもいやだったけれど」。

弟の小鳥　「水をくんで来てあげようか」。

姉の小鳥　「だいじょうぶよ。まあ、つばきがさいているわ」。

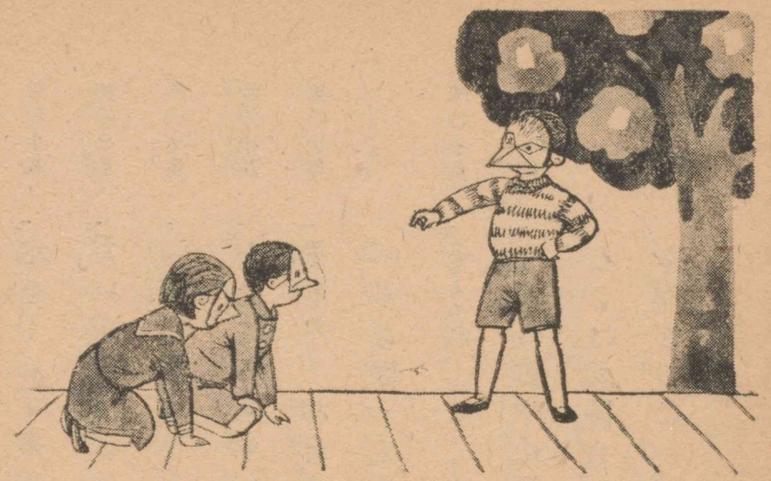
弟の小鳥　「いいだろうな、こんな所に住んでいたら」。

姉の小鳥　「日あたりもいいし、南側だからつめたい風も当たらないわ」。

弟の小鳥　「そうだ。ねえさん、ぼくらもここに住もうよ。これから先いくら行っても同じだから」。

姉の小鳥　「そうね。ここなら気に入ったわ」。

弟の小鳥　「もう、雪や北風にはこりこりだ。いままでの所に比べたら、ここは天国さ」。（つばきの木の方に行きながら）「ねえさん、すを作るのにいいえだがあるよ。うれしいな」。（と言いながら、つばきの花をとります。）



——そこへ、もずが来ます。

もず　（大声で）「だれだ、ぼくのやしきをあらすのは。」

——姉の小鳥、びっくりして立ちあがります。弟の小鳥は持っていたつばきの花を落とします。

もず　「よくもだいじな花をとったな。もうゆるさないぞ。」

姉の小鳥　「知らなかったものですから、どうぞおゆるしください。」

もず　「知らなかったと。おいおい、この

近所の森や林に住んでいる者で、ここがもず様の庭であることを知らない者は、ひとりもないはずだ。るすを知ってしのびこんだにちがいない。そうだろう。」

姉の小鳥　「いいえ、わたしたちは雪にあって、おく山からにげて来たものです。（弟に）さあ、おまえも早くあやまりなさい。」

弟の小鳥　「姉の言ったとおりです。ぼくたち今ここに着いたばかりです。お願いしますから、ゆるしてください。」

もず　「ふん、うそでもなさそうだな、こんどだけは見のがしてやろう。」

姉、弟の小鳥　「ありがとうございます。ありがとうございます。」

もず　「それはそうと、おまえたちのいた山でだれがいちばん強い。」

姉の小鳥　「さあ――」。

弟の小鳥　「山は強い者ばかりいます。だって、これからの山は寒さがもっとひどくなるのですから、からだが強くなければくらせないのです」。

もず　「ふん、おもしろい。よわむしの相手はもうあきた。よし、その山に行ってみよう」。

姉の小鳥　「山に。無理ですわ。今から」。

もず　「何が無理だ、おれがよわいとでも言うのか」。

姉の小鳥　「いいえ、そうではありませんが」。

もず　「このつばさで行けばひと飛びだろう。さあ、おまえたち、ゆるしてやるかわりに案内しろ」。

弟の小鳥　「もう、いやです。山は」。

もず　「よわむしめ、とちゅうでゆるしてやるから行け」。

弟の小鳥　「それでは、一の山までですよ。ねえさん、ちょっと行ってきますから、待っていてください」。

姉の小鳥　「わたしもいっしょに行きます」。

弟の小鳥　「だめだめ、ねえさんはつかれているから」。

もず　「ぐずぐず言わずに早く行け」。

弟の小鳥　「はいはい。待っていてね。ねえさん」。

姉の小鳥　「早く帰ってね」。

――もずと、弟の小鳥が行きます。姉の小鳥が見送っているうちにまくになります。

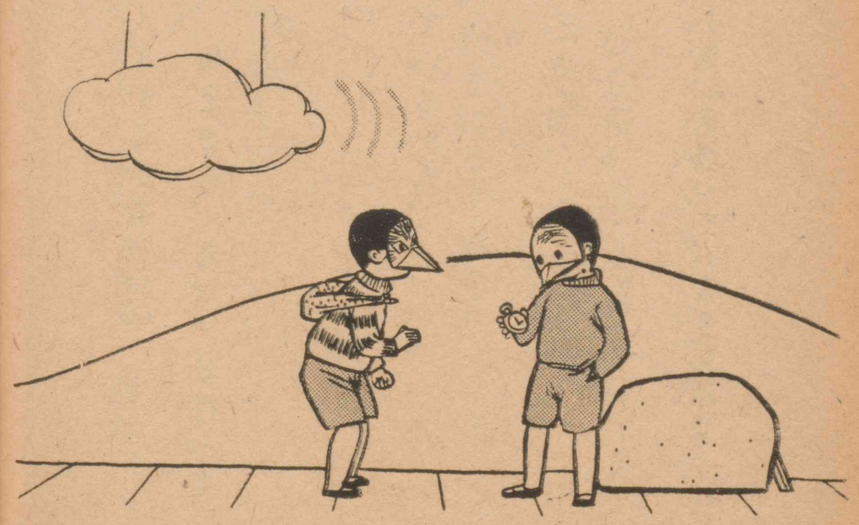
二の場面

出る人――もず
山鳥
一のうさぎ、その他大勢
さる大勢
雪の精大勢

時――一の場面の午後

所――山の上

――まくがあきます。石のそばにもずが



ねています。そこへ山鳥が通りかかります。

もず　（はねおきて）「きみ、きみ。」

山鳥　「……」。（びっくりしたように立ち止まります。）

もず　「何時ごろだい、今。」

山鳥　（大きなかい中時計をとり出して）「三時すぎですね。」

もず　「もうそんな時間か。」

山鳥　「旅の方ですね。どこから来たのですか。」

もず　「ふもとから、十三の山をこして来たのさ。」

山鳥　「そして、これからどこまで行くのです。」

もず　「あてはないよ。山から来たという小鳥にだまされて、ここまで来たが、だれひとり強い者にあわないのだ。どうだ、

きみ、この辺に力の強い者はいないか」。

山鳥　「どうするのです」。

もず　「力くらべさ。どうだ、きみは」。

山鳥　「そんなことなら、早くふもとにお帰りなさい。力くらべどころか、わたしはあの雲を心配しています」。

もず　「どの雲だ。それがどうした」。

山鳥　「きみは山になれないから、雲のようすは見てもわからないのです。ぼくは急ぎますから」。（と、足早に行ってしまう。）

もず　「にげたな。よわむしめ。雲が何だというのだ。ああ、いいながめだ。まったく、あんな山鳥を住ませておくにはもったいない。おや、うさぎが来るぞ。こんどは、けものをか

らかってやろう」。

——そこへ、うさぎが来ます。

もず　「きみ、きみ、うさ君」。

うさぎ　「うさぎとはっきり言ってもらいたいね。いったい、だれだね、きみは」。

もず　「今にこの山の王様になるもず様さ。覚えていてもらいたいね」。

うさぎ　「王様なんかいらないね、この山には」。

もず　「いらなくてもなって見せるよ。どうだね。山おくの冬は」。

うさぎ　「そんなのんきなことを言わないで、山をおりた方がいいよ。あの雲が心配だ」。

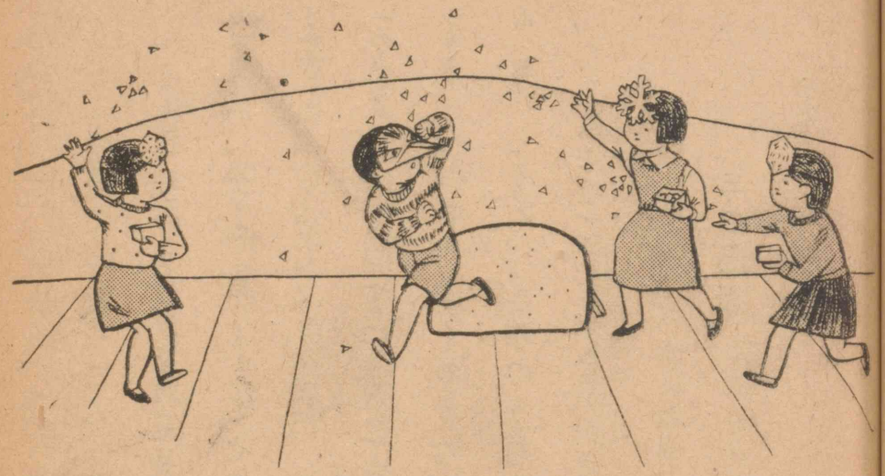
もず　「また雲か、だれもかれも雲ばかり心配している。あきれた話だ。」

うさぎ　「じょうだんじゃないよ。雪でも来たら食べ物はないし、たいへんなことになるんだ。」

もず　「ふん、なまけ者ばかりだから、そんなことを心配するのだ。おれなんか、いつでも、いなごや魚をひぼしにしてふもとにとってある。」

うさぎ　「そりゃ感心だ。そのふもとに早く帰った方がいいよ。」（と行ってしまいます。）

もず　「鳥もけものもよわい者ぞろいだ。ああ、つまらない。」（と、横になってねむります。）



——音楽が聞こえます。しばらくすると、雪の精が大勢出て来ておどり始めます。おどりながら雪をまきます。気がついて、もずがそこらをにげまわります。雪の精のおどりはますますさかんになって、もずはその中にかこまれてたおれてしまいます。雪の精がおどりながら行ってしまうと音楽がしだいによわくなります。山鳥がもずをさがしに来ます。

山鳥　（たおれているもずに気がついて）「居た居た。（大声で）おういい、うさぎ

君、おさるさん、早く来て」。

——さっきのうさぎをはじめ、大勢のうさぎやさるが走って来ます。

山鳥　「早く、早く、こごえているんだ」。

うさぎ　「だいじょうぶだ。まだ少しあたたかい」。

一のさる　「ぼくのすに連れて行こう」。

うさぎ　「いや、ぼくのうちがあたたかくていいだろう」。

山鳥　「うん、きみのうちがいい、早く連れて行こう」。

——みんなで、もずをかかえて連れて行きます。まくになります。

三の場面

出る人——もず

大勢の小鳥たち

時——一、二から数日たった朝

所——一の場面と同じ

——一の小鳥をせんとうに、小鳥たちが集まってきます。

二の小鳥　「いいの、なんだかこわいわ」。

三の小鳥　「きみ、ほんとうにいいのかい」。

一の小鳥　「だいじょうぶったら。（つばきの方を向いて、大声に）もずさん。みんな連れて来たよ」。

——小鳥のうちの二三人がにげだそうとします。

一の小鳥　「にげなくてもいいんだよ」。

——そこへ、もずが出て来ます。

もず　「やあ、みなさん。よく来てくれたね。じつはきょうから、この林やつばきの木をみんなの遊び場所にしたいと思って」。

一の小鳥　「ほら、ぼくの言った通りだろう」。

三の小鳥　「ほんと。遊んでいいの」。

もず　「ぼくは、みんなとなかよくしたいんだ。いままでのことはわすれていっしょに遊ぼうよ」。

二の小鳥　「うれしいわ。早く行ってみましょうよ。つばきのえだに」。

もず　「あまいみつが待っているよ」。

——小鳥たち、「わっ」と言いながら走って行きます。一の場面にでた小鳥の姉と弟がのこります。

弟の小鳥　「もずさん、ぼくたちも遊んでいい」。

もず　「ああ、きみたちもいたのか。いいともさ。——そうだ。きみたち、すがないんだろう。あのつばきに作ったらいい」。

姉の小鳥　「あのつばきに」。

もず　「そうさ、きみたちのおかげで山に行って、人のしんせつがどんなにうれしいものか知ったのさ。それから(頭をかいて)いばるのが、つまらないっていうこともわかったよ」。

姉の小鳥　「居たいわ、ここに。」

もず　「いつまでも居たらいいよ。」

弟の小鳥　「ありがとう、もずさん。」

もず　「礼を言わなくたっていいんだよ。もともとぼくのものじゃないのだから。だけど、ぼくは、ここにいて自分でできるだけのことをしてみんなの役にたちたいんだよ。さあ、早く行って、いいえだをみつけておいでよ。」

――姉と弟の小鳥、手をつないで走って行きます。もずがうれしそうにそれを見送っています。小鳥たちの楽しそうな声にまじって音楽が始まります。そのうちにまくがしまります。

よい話し方　よい聞き方

みなさんは、自分の思っていること、知っていることを、じょうずに話したいと思ったことはありませんか。先生やおうちの人、友だちやラジオなどのお話を聞いて、それがよくわかってうれしく思ったことはありませんか。

人の話がよくわかるということは、本を読んだり、美しい絵や音楽を見たり聞いたりするのと同じように、わたくしたちがいい人になるためには、とくにたいせつなことです。また、よく話すということは、それにもまして、わたくしたちをそだててくれることなのです。

しかし、みなさんは、正しいことばで正しい話し方をしていますか。人の話を正しく聞きとっているでしょうか。ここでは、みなさんがよい話し手、よい聞き手になるために、読んでいただきたいことが、童話を引き合いに出して、おもしろく書かれています。

(一) 人の話をよく聞きましょう

アラビヤン・ナイトから

むかし、あるところにカシムとアリババというふたりの兄弟が住んでいました。ある日、弟のアリババが森へたきぎを取りに行きました。たきぎをたくさん集めてひと休みしていると、急に向こうの方から、大ぜいのどろぼうがうまに乗ってやって来ました。アリババはおどろいて、大きな岩の前にある一本の高い木に登りました。アリババが木の上から見ていると、どろぼうたちは岩の前に

来て、

「開け、ごま。」

と言いました。するとふしぎにも大きな岩の戸がひとりでに開きました。どろぼうたちは重そうなふくろを持って、その岩屋の中にはいりました。やがて、からのふくろをさげて出て来て、

「しまれ、ごま。」

と言うと、戸がひとりでにしまりました。

どろぼうたちが遠くへ行ってしまってから、アリババがためしに、

「開け、ごま」

と言うと、戸が開きました。中にはいってみると、お金が山のよう

に積んであります。アリババは、そのお金を持てるだけ持ってうちへ帰りました。

この話を聞いた兄のカシムが、そのよく日、うまを引いて出かけていきました。そして、弟に教えてもらったとおり、

「開け、ごま。」

とどなると、戸が開きました。中にはいって、大きなはこにお金をいっぱいつめこみました。

ところが、外へ出ようという時になって、しめておいた戸をあけようとしましたが、だいじなことばがどうしても思い出せません。なんでも、食べ物だったと思って、「開け、麦」「開け、きび」などと、

いろいろ言いますが、戸は動きません。そのうちにどろぼうたちが帰って来て、カシムはとうとうつかまってしまいました。

それからどろぼうたちは、岩屋の中からお金をもち出したアリババをさがし出そうとしますが、ちえのあるめしつかいにじゃまされ、かえってひどい目にあわされます。そしてアリババはたくさんのたから物やお金を持ち帰って、びんぼうな人に分けてやりました。

この話でおもしろいところは、めしつかいのモルシャーナのちえのあることなのですが、私がここでみなさんに考えていただきたいと思うのは、にいさんのカシムが、なぜ、帰りに「開け、ごま。」ということばをわすれてしまったかということです。初めにはそれを

知っていたので、「開け、ごま。」と言って、岩屋の中へはいりました。ところが帰りにはわすれてしまいました。どうしても、思い出せなかったのです。なぜでしょう。

それは、童話だからそう作ってあると言えばそれまでですが、お金を見て、お金のことばかりにいっしょうけんめいになってしまったから、わすれてしまったのですね。何かにあまりいっしょうけんめいになると、外のことはわすれてしまうものです。カシムは欲ばりでしたから、初め、弟の話を聞く時に、お金のことばかり考えていて、「開け、ごま。」「しまれ、ごま。」ということばのことなどは、あまり注意して聞いていなかったのでしょう。

だいこんとダイヤモンド

あるところにおひゃくしょうさんがおりました。秋にとれたやさいはみんなじょうできでしたが、その中でもだいこんは、ことによくできました。おひゃくしょうさんは、こんなできのいいのを町へ行って売ってしまいたくないので、その中でもとくにいいのを十本ばかり選んで、お金持のおじさんのところへ持って行きました。しかし、おじさんには、おひゃくしょうさんのりっぱな心がわかりませんでした。「こんなだいこんなんか、町へ行けばいくらでも買える」。と思っていました。そこへいつもおせじのいい植木屋さんが来て、山へ行ったおみやげだと言って、しゃくなげをくれました。

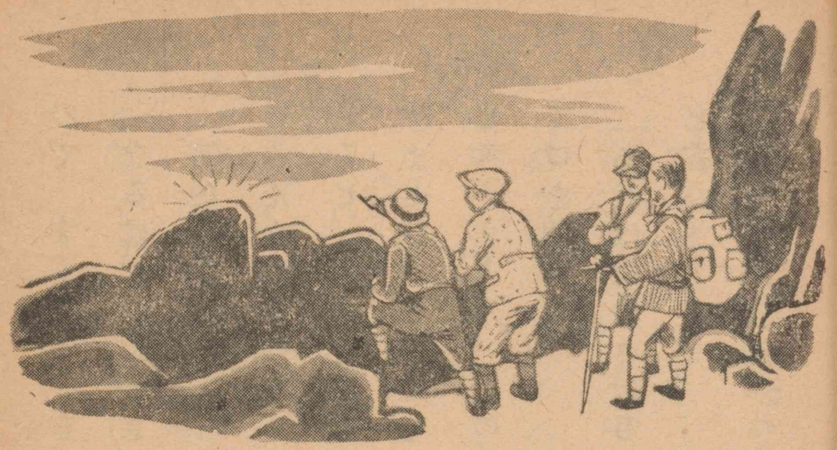
植木屋さんは、しゃくなげを植えてしまってから、山の話を始めました。

「だんな、ふしぎなことがあるものです。それは、とても人間の行けるような所ではありません。けわしい山のおくの、しかも谷の向こう側です。大きな岩があって、その岩の上に日がさすと、そこが五色の火のように光るのです。何だろうといって、あんない人もふしぎがっていました。」

と、いうのです。おじさんは、それはダイヤモンドではないかと思いました。

「ガラスびんのかけたのではないだろうか。」

「じょう談ではありません。さるだってくまだって行かれる所では



ありません」。

こんな話をすると、おじさんは、もしダイヤモンドだったら、たいへんなお金になると考えました。そこで、植木屋さんをさそって、そのけわしい山へ登ってみることになりました。力の強い案内人をふたりもたのんで、遠い山おくへ道を分けてはいって行きました。そしてやっと植木屋さんが、光るものを見たという場所までたどり着きました。植木屋さんは、もしあの光る物がいつの間にか無くなっていはしないかと心配でなりませんでした

ので、すぐその方を見ると、ちかちかとまぶしく光る物があります。
「なるほど、ふしぎだ。」
「何だろう。」
みんなはその方を見て首をかしげていました。おじさんはこれを見ると、高い費用を使って、ここまでやって来たかいがあったと喜びました。それにしてもあそこへは、どうして行ったらいいだろうと考えました。その時、今までだまっていた案内人のひとりが初めて口を開いて、
「あれは岩のさけ目から水がわいているのだ。」
と言いました。
「え、水。」「水が――。」

ふたりは、あの光る物がなんでもない水であったとわかって、びっくりしてしばらく口もきけません。
「そう言えば、水にちがいない。」
岩の先から水のわくのはあたりまえです。
おじさんは帰りにぶつぶつ言い続けました。
「おまえさんは商売なのに、岩かどから水がわくことがわからなかったとは、どうしたことだ。」
おせじのうまい植木屋さんも、ちょっとした話がこんなことになるとは、思いもよりませんでした。

村に帰ったおじさんは、おひゃくしょうさんのりっぱな心がわかるようになりました。

この話は、お金持のおじさんが、欲ばって損をした話ですが、おひゃくしょうさんのように、まじめに働いているのが正しいということが、わかるお話とも言えます。おじさんは「岩かどにきらきら光る物」の話を聞いた時、なぜ、水のことを考えつかなかったのでしょう。なぜ、ダイヤモンドかなと思いこんでしまったのでしょう。やはりそれは、欲ばった気持があるからにちがいありません。欲ばっているから、人の話を本当におちついた気持で聞きとれないのです。

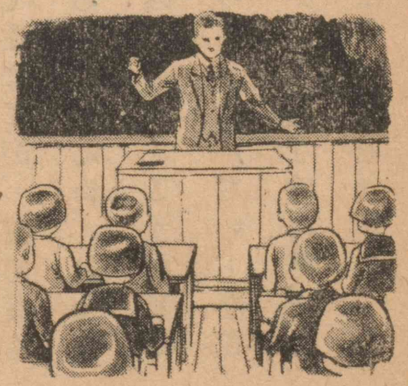
よい聞き方

今、ここにあげた「岩屋の中のどろぼう」のお話も、「だいこんとダイヤモンド」のお話も、どちらも童話ですが、みなさんのふだんのくらしの中にも、これに似たことがありませんか。今の植木屋さんのように、何でもないと思ってちょっと話したことが、だんだん大きくなってしまったことはありませんか。お金持のおじさんのように、他人の話を自分でこうだと思いこんでしまったり、カシムのように、だいじなことをよく聞かずに出かけて、かんじんな時に思い出せなかったり、そういうことはないでしょうか。

人の話を正しく聞きとることは、何でもないことのようで、じつにむずかしいことです。

まず、注意深くなければ人の話が全部聞きとれないし、心の中で何か他のことを考えていては、正しく聞きとることができません。

人が話をしているとちゅうで、話を横どりして自分が話しだすのはやめましょう。自分がそうされた時のことを考えてみましょう。小さい子供の話でも、しんせつに聞いてやりましょう。お友だちの話や目上の人の話は、敬って聞きましょう。何よりもおちついて聞いて、正しいことと正しくないこととをよく聞き分けるようにしましょう。

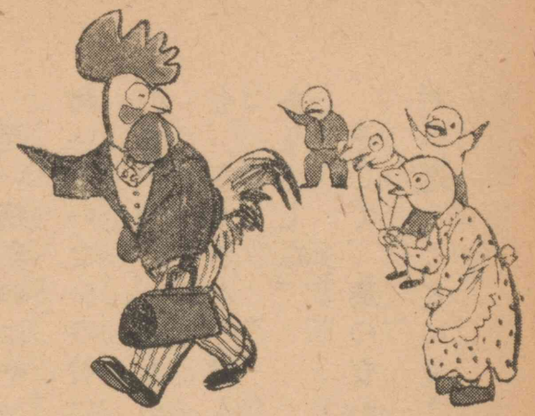


(二) 正しいことばを使いましょう

——つばめの通訳——

悪い病気のはやった年のことでした。これは東北地方の太平洋に向いたいなかの村にあったお話ですが、この海岸はことに悪い病気がはやって、おさかなを取ることのじょうずなかもめたちのうちにも、たくさんの病人ができました。病気で死ぬかもめもたくさんにありました。

そこで、鳥のなかまで相談して、ひとりのお医者さまをその漁師村へ送ることにしました。そのお医者さまに、悪い病気を調べさせ



ることにしました。だれを送ったがよかろう、たかがよかろうか、さぎがよかろうかと、いろいろ話し合いがありました。それにはにわとりがよかろう、あのにわとりなら、むずかしい役目をりっぱに果たして来るだろうということになりました。そこでにわとりは、選ばれてお医者さまの道具をさげて、はるばると東北の空へ旅立ちました。

このうわさが仙台（せんだい）の方へ伝わりますと、あの東北の都会に住むとびだのすずめだのが大喜びで、お医者さまの来るのを待ちうけていました。

ところが、にわとりが仙台まで着いてみて、第一にこまったのはことばでした。にわとりはとびやすずめに案内してもらって、仙台からめざす村の方へ出かけましたが、その土地のことばはなまりが多くて、どうしても、かもめの言うことが聞きとれませんでした。この村のかもめのことばは、仙台のとびやすずめにさえよく聞きとれなかったのです。

これにはかもめもこまってしまいました。かもめは、お医者さまの道具をさげているにわとりの方を見て、「よくこんな遠い所まで来てくださいました。」と言うらしいのですが、うみねこともいわれているこのかもめのことばは、みょうに鼻にかかって、

「ミュウ、ミュウ——ミュウ、ミュウ。」

としか聞きとれませんでした。

こんなにことばがよく通じないでは、悪い病気を調べようもありません。そこでとびとすずめは、その海岸ににわとりを残しておいて、このはま辺のことばを聞きとれる者を仙台までさがしに行きました。

そこへ外国人のつばめをつれて来た者がありました。このつばめは遠い遠い国の方から来ているのですが、知らない土地のことばを覚えようというねっしんから、この村の方までよく飛んで行って、かもめの方言までよく知っていたのです。外国人に自分の国のことばを通訳してもらうと言えば、とびもすずめも少しきまりが悪かったのですが、このつばめのほかに、この土地のなまりのわかりそう

な者は見あたりませんでした。とびとすずめは頭をかきかき、つばめを案内して行きました。

どうでしょう、あのかもめの鼻にかかった、「ミュウ、ミュウ」がつばめにはすっかり聞きとれたのです。悪い病気のことで、お医者さまのたずねたいと思うことは、みんな、つばめが通訳してくれました。

やがてにわとりはお医者さまとしてのつとめを果たし、とびやすずめにも別れをつげて帰って行きましたが、外国人のつばめが通訳に来た話は、それからそのはま辺のかもめの間に長く残りました。

このお話を読んでどんなことを感じたか、みんなで話し合ってみ

ましょう。

方言というのは、その地方だけに特別なことばです。日本の国全体には通じないことばです。たとえば、所によって「かわいい」ということを「メンコイ」とか「メゴイ」とか言ったりしますが、これなどは方言です。なまりというのは、方言と同じ意味にも使いますし、特に声の出し方、発音の方もさします。「だいこん」を「デエーコ」とか「デアーコ」とかいうように発音する人がありますね。こういう方言やなまりは、その地方の人にはわかりますが、知らない土地の人には通じません。

「つばめの通訳」の話は、こういうところから生まれたものですが、そうかといって、急にこの方言やなまりをやめようとしても、今ま

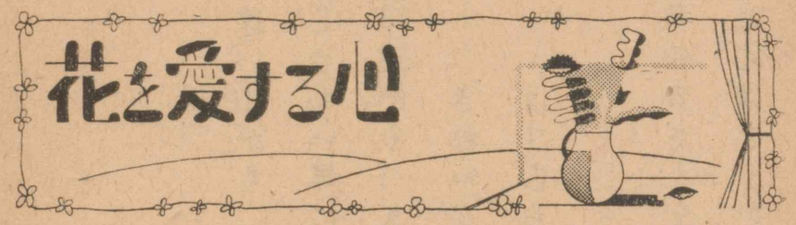
で使っていたものですからすぐにはやめられません。私たちは、方言やなまりをわらったり、ばかにしたりしないで、だんだんと日本中に通じる正しいことばを学んでいきたいと思います。

それから、このお話の題になっている「通訳」ということは、どういうことでしょう。それは、話し合いたいおたがいのことばがあまり大きくちがっている時、その間にたって、おたがいのことばを通じ合わせてくれる人のことですね。通訳はそのどちらものことばが、よくわかり、よく話せなければできませんね。つばめは広い世間をわたり歩いていますから、方々の国のことばをよく使えるので、この役目を果たすことができたのでしょう。これもこのお話のおもしろいところだと思います。

私たちは、外国人とじかにお話はできませんが、よい通訳の人が中にたってくれさえすれば、どこの人ともお話ができますね。

しかし、それにしても、私たちが、方言やなまりの多いことばで話したのでは、かんじんの通訳の人にわかってもらえませんから、お話できません。英語やフランス語を自由に話すことができて、それらの国の人と自由に話せるようになれば、通訳の用はなくなるわけですが、これは、なかなかむずかしいことです。私たちは、まず、私たちのことばを正しく、美しく話せなければなりません。

そうすることが、よその国の人ともお話のできるもとになるということがわかりますか。



ここには、花に関するいろいろな文を集めました。

ここの文章は、ちょっとりくつっぽい文章なので、みなさんには、少しほねがおれるかもしれませんが、こういう文章にもしだいに読みなれて、よく考える力をつけてほしいと思います。「うめ開く」のよびかけは、みんなで演出をくふうしてください。よびかけは、ことばをはっきり、正しく発音したり、ことばのあらわす意味を、美しい声、よくそろった声にもりあげたりするのに、たいそういい勉強ができます。

花の詩も、よく味わってください。「野ぎく」のところに、詩の味わい方を少し細かく書いてありますから、これを参考にして、なるべく深く読むようにしてください。

みなさんも、きっと花ずきの子供だと思いますが、これらの詩や文章を読んで、もっともっと花を愛する子供になってくださったら、この上もなくうれしいことです。

(一) 野ぎく

遠い山から　ふいて来る
こさむい風に・ゆれながら、
けだかく、きよくにおう花。
　きれいな野ぎく
　うすむらさきよ。

秋の日ざしをあびて飛ぶ
とんぼを　かるく休ませて

しずかにさいた野べの花
　やさしい野ぎく
　うすむらさきよ。

しもがおりても　負けないで
野原や山に　むれてさき、
秋のなごりを　おしむ花。
　明かるい野ぎく
　うすむらさきよ。

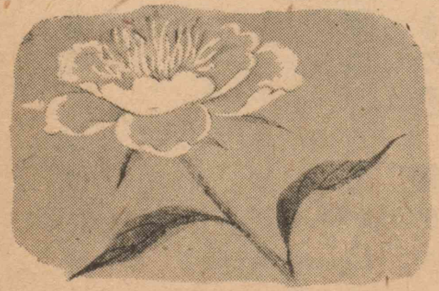
。

これは私のとてもすきな歌ですが、みなさんも、音楽の時間などに、たぶんおならいしただろうと思います。

野ぎくは、秋の初めから冬の初めにかけて、野や山、それもあまり人目につかない所にさく花です。しかし、だれでもよく知っている花ですね。ダリア、ばら、チューリップ、しゃくやくなどの花が、大きくてはでなにぎやかさを持っているのに比べて、野ぎくはじみで、つつましやかな花です。ダリアやばらを、美しい着物を着て人目をひくようなおけしょうをした、都会の女の人にたとえると、野ぎくは、小ざっぱりしたかすりの仕事着に、す顔そのままの、村のむすめさんを思わせるような花ということはできないでしょうか。

これは一つのたとえで、あたってはいないかもしれませんが、私は、つぎのようなことを、みなさんに考えてもらいたいと思って、こんなことを書きだしたのです。

というのは、私たちが花を見る時、ただ、「この花はきれいだなあ」と思うだけでなく、もっと深い見方をしているということなのです。ダリアも野ぎくも、きれいなことにちがいはありませんが、その美しさは同じではありませんし、それぞれの花からちがった感じを受けます。そのちがいをはっきりさせるために、これをほかのものにたとえてみようとする物の見方は、よほど進んだ、深い見方だといえましょう。



。

さて、野ぎくの作者は、この花をどんなに見ているでしょうか。少し調べてみましょう。

第一節には

けだかく　きよくにおう花

どうたっていますね。野ぎくに限らず、きくの花の類は、たしかにどこかけだかさを感じさせます。また、うすむらさきの色、重なっていない花びら、すみきった空気の中でさき、ほんのりとにおう花のかおりには、きよらかさもじゅうぶんに感じさせられます。

秋晴れの野道で、野ぎくの花にとんぼがとまり、何か話し合って

いるかのような第二節の風景は、そのままが日本画ですね。作者は、そうした野ぎくに、静かさややさしさを見いだしています。野ぎくは、花も小さく、せもひくく、さいている場所からいっても、作者の感じたものは、私たちにもよくわかります。

第三節では、まず、「しもがおりても負けない」とよんで、この小さなかわいらしい花に強さを見いだしています。

それから、

秋のなごりを　おしむ花

というのは、どういうことをうたったのかわかりますか。秋ももう終りになって、朝夕はめっきり寒く、時にはうす白くしものおりる

こともあるようになると、庭や野原の花も、ほとんどかれてしまっている。そうした中に、野ぎくだけが、私たちのすきなこの秋が、いま少し長く続いて欲しいというように、さき続けていると、そういうところをよんだのですね。

こうなると、作者の目は、ずいぶん深く花の心をとらえています。いや、作者がすっかり野ぎくの心になっているといった方が正しいかもしれません。

（二）私たちと花

このように、花はだまっていても、見る人の心や見方により、いろいろな美しさ、いろいろな感想、時にはまた、さまざまな思い出などを起こさせてくれます。みなさんも、何十何百とある花について、その花の持っている美しさなり性質なりを書き分けてみると、おもしろい作文や童話ができそうですね。

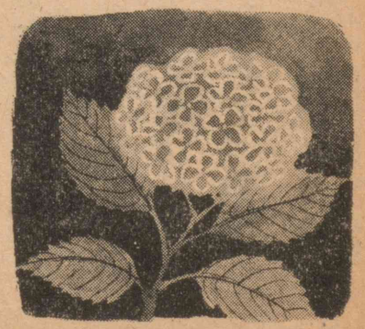
むかしから、花のことをかいた詩や物語や絵本などは、ほとんど数えつくすことができないほどたくさんありますが、それらの詩や文章や絵は、みなその作者が、その花について、ちがった美しさを

見いだしたものといえましょう。

花ずきのわたしたちは人や物の名にもずいぶん花の名をつかっています。みなさんのお友だちにそんな名の人はありませんか。それから、女の人の着物のもようなど、大部分が花だといってよいくらいですね。

つくえの上をかざる花、電車やバスの中にやさしくほおえむ花、殺風景な工場を明かるくする花。花をつくって静かに楽しんでいる人を、私たちはよく見かけます。

日本ではむかしから、花をなるべく美しく、また自然に近いすがたで見るために、いけ花がたいそう進んでいます。みなさんも、おかあさんやおねえさんが、花器の前にきちんとすわって、お花をい

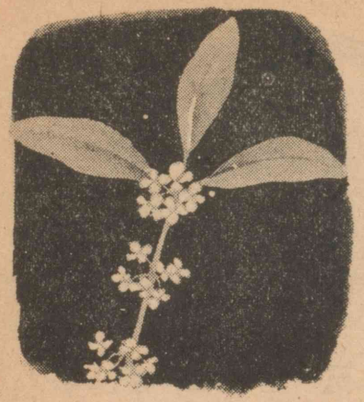


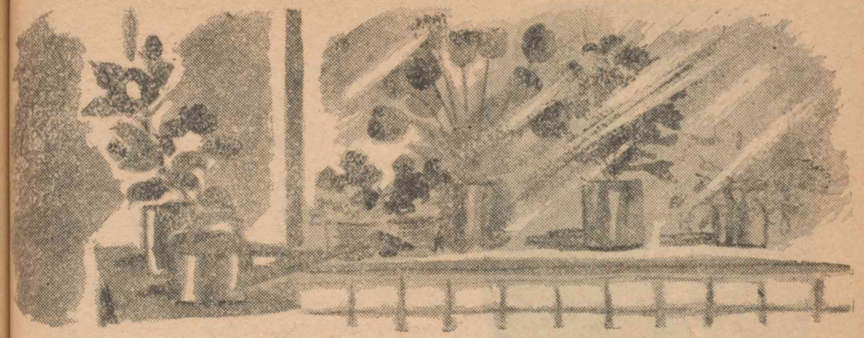
けているのを見たことがあるでしょう。

花は生きたこよみです。さくらがさくと、春らしい気分に、人の心もうき立ってきます。つゆの晴れ間に、大輪のあじさいを見ると、ああもう夏だなと思い、かきね道を歩いていて、ふと、ただよってくるもくせいのかおりに、秋をしみじみと感じます。

花は、動物のように、鳴いたりとびまわったりしませんが、それでいて、私たちの心の底にいろいろなことをささやきかけます。このささやきをよく聞ける人には、よい歌や絵や文がかけるわけですね。

私たちは、花の改良にもいろいろくふうを重ねてきました。どの花も、もとはみな野生の花でし





たが、それを改良して、今のように大きく、美しい花をさかせるようにしたのです。きくやあさがおには、ずいぶんみごとなものがありますね。それに、ちかごろは、温度や光線を加減して、季節はずれの花をさかせることもできるようになり、花屋の前に立った私たちをとまどいさせることさえあります。

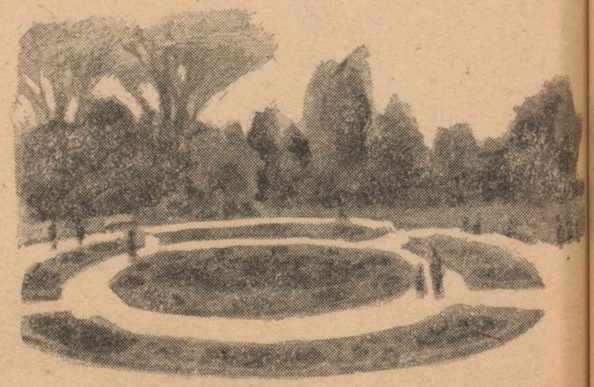
○

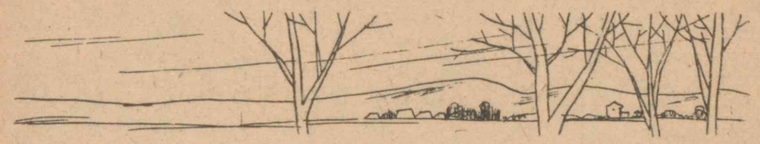
花を見ることはだれでもすきですが、みんながみんな、「野ぎく」の作者のように、静かにすみきった心の目をもって、その花の本当の美しさを見ること

は、なかなかできますまい。しかし、それほどでなくても、花を見ている心はみんな静かで、やさしく、美しいものです。

私たちは、もともと花ずきです。この花ずきの心をもっと深く育てましょう。そして、自分ひとりで見るだけでなく、花の美しさをみんなでわかちあいたいものです。ほんの一りんいけられた花が、教室を明かるくなごやかにするばかりでなく、私たちの勉強までも楽しくしてくれるのです。

日本の国が、小鳥にも住みごこちのよい平和な国であるとともに、美しい花の国でもあるようにしたいものですね。





(三)　二月の花――よびかけと詩

うめ開く

一

1の人　風。

2の人　風。

3の人　北風が、林をすぎる。

4の人　かれ木のとがったえだが、ぶるぶるふるえる。

5の人　風。

6の人　風。

7の人　北風が、空をふきぬける。

8の人　遠い山脈の雪が、つめたく光る。

9の人　風。

10の人　風。

1の人　北風が、この道をふく。

2の人　からだがこおるような、二月の朝。

3の人　けれども、わたしは風の中に、うめの花を見た。

4の人　春を知らせる花を見た。

5の人　葉をもがれ、
6の人　こおった土に根をちぢめ、
7の人　じっと冬をしのんだ、このうめが――
8の人　はげしい風の日も、
9の人　ふりつもる雪の日も、
10の人　じっと春を待った、このうめが――
1の人　冬空を、つきさすようにのばしたえだに、
2の人　ほんのりと、緑をうかべた細いえだに、
3の人　点々と、白く花を開いた。
4の人　点々と、うめは白く、
全部　うめは白く、北風の中に花は開いた。

二

5の人　冬の日ざしの中で、
6の人　だれにも知られず、
7の人　そっとふくらんだかたいつぼみが、
8の人　ある日、白くさき出た――
9の人　その音を聞きつけたのか、
10の人　そのにおいによび起こされたのか、
全部　となりのえだでも、つぼみが白くやぶれた。
1の人　点々と、つぼみが白くやぶれた。
小さなうめの花は、

2の人　遠い山脈の雪をおそれない。
3の人　冬が、もうすぐ去って行くのを知っているから。
全部　そうだ。冬が去るのを知っている。
4の人　小さなうめの花は、
5の人　けさの北風をおそれない。
6の人　春が、もうすぐやって来るのを知っているから。
全部　そうだ。春が来るのを知っている。

三

7の人　花。
8の人　花。
9の人　うめの花が、つめたい朝の空気にかおる。

10の人　すがすがしい気持で、
1の人　わたしは、その花のかおりをかぐ。
元気に冬をこしたいと、
その花のかおりをかぐ。
2の人　花。
3の人　花。
4の人　うめの花が、緑を失った冬の庭にさく。
5の人　はればれした気持で、
わたしはその花を見上げる。
6の人　たのしく春をむかえたいと、

その花を見上げる。

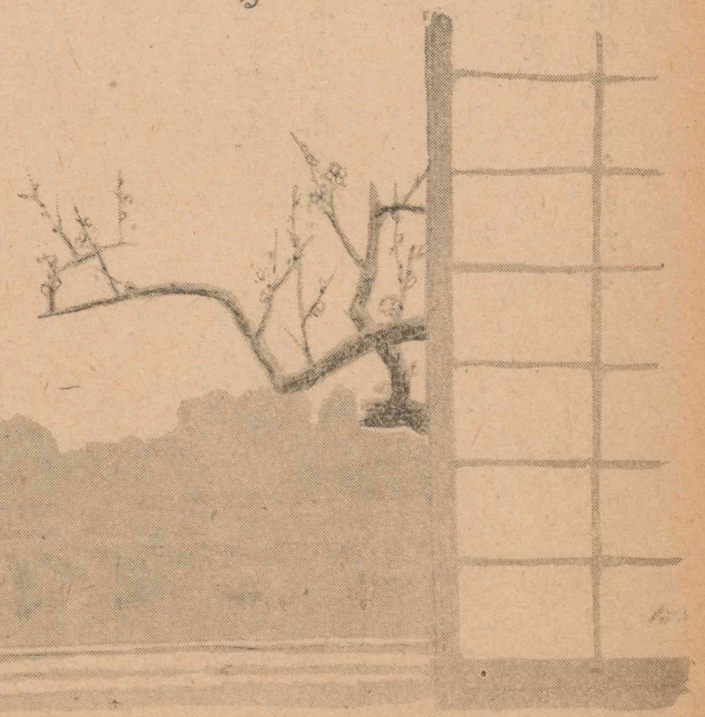
7の人　花。
8の人　花。
9の人　うめの花が、
10の人　わたしの心の中でも、つぼみをやぶっていく。
1の人　風にも負けず、
2の人　雪にも負けず、
3の人　雪にも負けず、
4の人　ひとつ、

5の人　ひとつ、
6の人　冬のつぼみをやぶって、開いていく。
7の人　花。
8の人　花。
9の人　うめの花が開く。
10の人　北風のふく二月の朝。
1の人　点々と、
2の人　白く、
3の人　うめの花が、
全部　うめの花が、さきかおる。

うめ

庭さきの
うめがさきはじめた
白い花が、ぽちぽちと
星のように、光っている

ああ　あの白い花は
春の信号だ
あれは　銀色の山のむこうから
もうすぐ、春がやってくるのを



私たちに　知らせているのだ
だれよりも早く——

うめよ
かしこそうな　季節の信号手よ
しずかなえだえだの中の
きれいな光の信号よ
見あげていると
なつかしい春のにおいが
そっと　むねにしみこんでくる

つばき

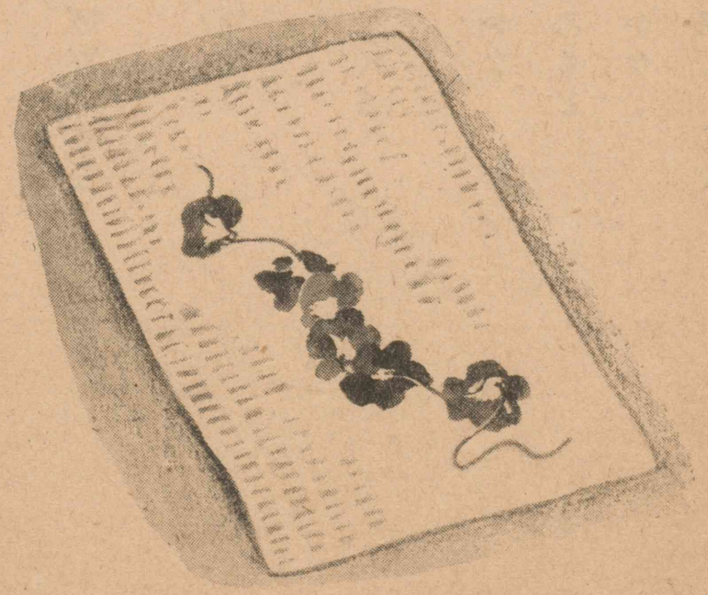
つばきの花輪が　落ちている
ひもに通した赤い花輪が
むしろの上にころがっている
となりのさゆりちゃんたちの
ままごとのあとだな

つやつやした　つばきのはっぱは
おさらにつかったのだな
花びらをきざんで、かふんをかけてある
ごちそうにしたのだな

やっぱり　このつばきの木かげだったな
人形をねむらせたり
花輪を首にかけたおきゃくさんを
おまねきしたりした
なつかしい思い出がわきだしてくる

つばきの花は　いまがさかりかな
こんなにちっているところをみると
もう　そのさかりをすぎたのかな
しげった葉のかげに　小鳥が来ているな

つばきの木かげのあまいか
おり
用水路にも　つばきの花が
しずんでいる
じっと見ていると四年生の
一年間が思い出される
もうすぐ私も五年生だな
どこかでさゆりちゃんの声
がする



ことばの表

あいて……九
あさがお……十四
あじさい……十三
あしばや(に)……三
あじわって(あじわう)……二十三
あずき……二十四
あて……三
あね……三
あびて……二十四
あまい……八
あらためる……三
アラビヤン・ナイト……四十二
アリババ……四十二
いきおいよく(いきお
いよい)……十九
いけて(いける)……十三
いけばな……十三
いつのまにか……二十九
いなか……二十五
いのちびろい……一
いみ……六十
いやがられて(いやが
られる)……一
いわかど……五
いわや……四十三
うきたって(うきたつ)……十三
うしなった(うしなう)……八
うすじろく(うすじろい)……六十九
うすむらさき……二十四
うずもれて(うずもれる)……十
うばわれでも(うばわ
れる)……七
うみねこ……五十七
うわさ……五十六
えほん……七
えんしゅつ……六十三
おいだしました(おい
だす)……七
おおごえ……二十六
おかねもち……四十七
おきにいり……八
おくやま……二十七
おけしょう……六
おしむ……十五
おせじ……四十七
おぞうに……十三
おなか……二十四
おならい(した)……六
おひゃくしょうさん
(ひゃくしょう)……四十七
おみやげ……四十七
おもいこんで(おもい
こむ)……五十二
おもいつき……二十
おもいもよりません……五十一
おもそうな(おもい)……四十三
おんど……十四
か……五
かい(がある)……五十
かいちゅうどけい……三
かいりょう……十三
かおる……八十
かき……十二
かぎ……七
かきねみち……十三
かぐ……八
かげん……十四
カシム……四十三
かすり……六
かぞえつくす……七
かたむいて(かたむく)……六
かふん……八
かまいません……二十
から……四十三
ガラスびん……四十八
かんじん……五十三
かんそう……七
きび……四十四
きぶん……十三
きまりがわるかった
(きまりがわるい)……五十八
きもの……六
きよく(きよい)……六十四
きんじょ……二十七

くちばし……七
ぐったり……一〇
くま……四八
くらべて（くらべる）……一三
けいこ……二〇
けがわ……一
けだかく（けだかい）……六四
けだもの……九
けわしい……九
けんとう……一五
こうじょう……一三
こうせん……一四
こうふく……七
こかげ……八七
こくばん……一四
こごえて（こごえる）……一〇
ここのつめ……九
こざっぱりする）……六
こさむい……六四
ごしき……四八
ことに……四七
ごま……四二
こよみ……一三
こりこり……二五
さいりょう……五
さかな……二四
さぎ……五六
さくしゃ……六八
さけめ……五〇
さしえ……一三
さって（さる）……八〇
さっぷうけい……一三
さゆり（ちゃん）……八六
さんみゃく……七七
し……六三
しあげて（しあげる）……五
じか（に）……六二
しかも……四八
しげみ……九
しごとぎ……六六
じつ（は）……一六
しのんだ（しのぶ）……一六
しぼう……七
しまれ……四三
じみ……六六
しみじみ……一三
しも……六五
しゃくなげ……四七
しゃくやく……六六
じゅう……六二
じゅうさんばんめ……九
じゅんじょ……五
しょうがつ……一三
じょうだん……四八
じょうでき……四七
しょうばい……五一
しろうさぎ……九
しんごう……八四
しんごうしゅ……八五
ずいぶん……一三
すがお……六六
すがすがしい……八一
すじがき……五
すすめました（すすめる）……九
すみきった（すみきる）……一八
すわって（すわる）……一三
だいに（せつ）……六九
ぜんたい……六〇
せんだい……六六
そだてましょう（そだてる）……一五
それぞれ……一七
——ぞろい……一四
だいこん……四七
だいぶ……二四
たいへいよう……五五
だいりん……一三
たか……五六
ただよって（ただよう）……一三
たとえ……六七
たどりつきました（たどりつく）……九
たびだち（たびだつ）……四九
だまされて（だまされる）……五六
ためし（に）……一三
ためして（ためす）……四三
ダリア……六六
だれひとり……一三
だんな……四八
ちからくらべ……三三
ちからじまん……八
つうじる……六一
つうやく……五五
つきさす……一六
つげて（つげる）……一九
つつましやか……六六
つばさ……二六
つめこみました（つめこむ）……四四
てんごく……二五
どうほくちほう……五五
とくに……四一

どだいいし……一七
どなる……四一
とび……五六
とまどい……一四
とらえて（とらえる）……一〇
なごやか（に）……一五
なごり……六五
なだらか……六
なまけもの……三四
なまり……五七
なんじ……三一
にほんが……六九
にんげん……四八
のべ……六五
ばかにしたり（ばかにする）……六一
バス……七二
（きせつ）はずれ……六
フランスご……一四
ぶんしゅう……六二
ぶんしょう……一三
はたして……五六
はつおん……六〇
はなびら……六八
はなや……一四
はねおきて（はねおきる）……三一
はまべ……五八
ばめん……一五
はやった（はやる）……五五
ひあたり……二五
ひきあい（に）……四一
ひしがた……一三
ひととび……二八
ひとめ……六六
ひとやすみ……二四
ひとりで（に）……四三
ひぼし……三四
ひも……八六
ひよう……五〇
ひょうにん……五五
ひらけ（ひらく）……四四
ふきぬける……七七
ふくろ……四三
ふぶき……一〇
ふみこ（さん）……二〇
ふゆぞら……六
フランスご……六二
ぶんしゅう……一三
ぶんしょう……六三
ほしい……一八
ぽちぽち（と）……八四
ほんのり（と）……六八
まがった（まがる）……一三
（それにも）まして……四一
まちうけて（まちうける）……五六
まっさき……一四
みあたりません（みあたる）……五九
みいだして（みいだす）……六九
みつ……三九
みつからず（に）……一三
みのがして（みのがす）……二七
みょう（に）……五七
みわたしました（みわたす）……一一
むぎ……四四
むこうがわ……四八
むすめ（さん）……六六
めうえ……五四
めくって（めくる）……一三
めごい……六〇
めざす……五七
めしつかい……四五
メンコイ……六〇
もがれ（もがれる）……六八
もぎとられ（もぎとられる）……六
もくせい……七三
もったいない（ね）……九
もともと……四〇
もよう……七二
モルシャーナ……四五
やく……四〇
やくめ……五六
やしき……二六
やせい……七三
やぶれた（やぶれる）……七九
やまおく……三三
やまどり……八
ゆきのせい……二〇
よこどり……五四
よくあさ……一一
よびおこされた（よびおこされる）……七九
よわむし……二六
りくつっぽい……六三
りょうし……五五
れい……九
わかちあい（たい）……五五

漢字の表

課 5
側 6
止 7
谷 8
勧 9
連 10
拾 11
比 13
欲 18
済 19
案 28
辺 32
積 43
費 50
損 52
敬 54
訳 55
漁 55
師 55
覚 58
特 60
味 60
章 63
限 68
性 71
質 71
殺 72
良 73
加 74
減 74
育 75
脈 77
去 80

Copyright 1950, by
The Kyōiku Tosho Kenkyūkai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof may not be reproduced in any manner whatsoever without permission in writing from the authors.

小国 419

四年生の国語 下

Approved by Ministry of Education
(Date 1950)

感謝

左の作品を本書に掲載させていただきましたことについて、著作者諸先生に心から感謝をいたします。なお、規則や指示にしたがつて多少加除訂正のやむをえなかつたことについて御諒解をお願いいたします。

子供しばい……栗原 一登
人の話をよく聞きましょう……興水 実
つばめの通訳……島崎 藤村
うめ開く……栗原 一登
う め……村野 四郎

編者

東京都文京区大塚窪町
東京高等師範学校附属小学校内
財団法人 教育図書研究会
理事長 東京高等師範学校教授 佐藤保太郎
担当執筆者 東京高等師範学校教諭 田中豐太郎
〃 花田哲幸
〃 青木幹勇
〃 森下巖
〃 小島忠治
表紙 田原輝夫 さしえ 大槻定雄

印刷 昭和二十五年 月 日
発行 昭和二十五年 月 日 定価 円
著作者 財団法人 教育図書研究会 会長 務台理作
発行者 学校図書株式会社 代表者 川口芳太郎 東京都港区芝三田豊岡町八番地
印刷者 図書印刷株式会社 代表者 川口芳太郎 東京都港区芝三田豊岡町八番地
発行所 学校図書株式会社 東京都港区芝三田豊岡町八番地

本書の指導書・ワークブック・註釈書並びにこれに類する一切のものの無断発行を禁ずる。

文庫
0
950
9745
広島大学図書
0130449745

おことわり

本書の用紙は来年度使用教科書から
より良質のもの（新教科書用紙）を使
用することになつて居ります。